輸入水産物の価格上昇により存在感を増すパンガシウス

研究員　村澤博基

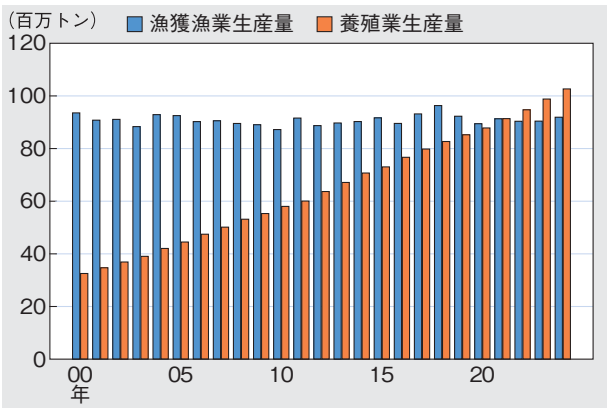
世界の漁獲漁業生産量は1980年代後半以降、8,600万～9,400万トンの範囲で推移し、生産量の大幅な増加は漁獲制限などにより見込みにくい状況にある（第１図）。一方、養殖業生産量は増加を続けており、24年には藻類を除く水産動物で１億トンを超えた。特にアジア地域では淡水養殖魚の増産が進んでいる（FAO, 2026a）。世界的な水産物需要が高まるなか、供給が制約されている魚種は価格が上昇し（第２図）、安価に生産できる養殖魚の重要性は高まっている。以下では、日本で輸入が増加している淡水養殖魚であるパンガシウスを取り上げ、その背景にある国際的な需給構造や輸入動向、生産・輸出の現状について説明する。

1　足元の輸入増加により利用用途も拡大

日本でも、主要な輸入魚種の価格が上昇している。こうしたなか、比較的安価なパンガシウス（学名：*Pangasianodon hypophthalmus*、英名：Striped catfis）の輸入量が増加している。パンガシウスは淡水に生息するナマズ類であり、主にアジア地域で養殖されている。飼料効率が高く高密度養殖が可能で、生産効率に優れており、比較的安価に生産できる。日本に輸入されるパンガシウスは、ほぼ全量がベトナム産である。輸入量は15年の2,647トンから25年には12,207トンへと、この10年間で4.6倍となった（第３図）。輸入単価をみると、円安が進行した24～25年においても平均輸入単価は500円／kg以下で推移しており、他魚種の価格が上昇するなかでも安定した価格水準を維持している（第３図）。

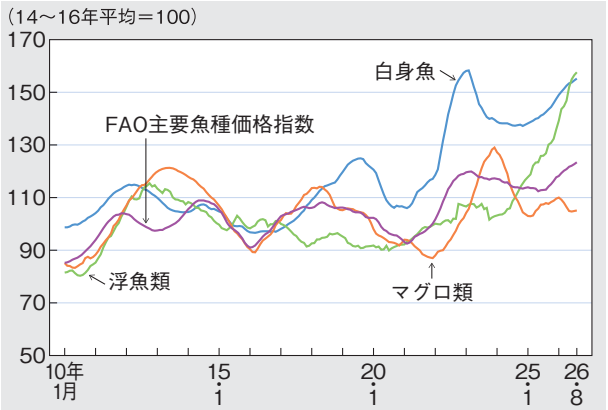
輸入量の増加に伴い、日本におけるパンガシウスの存在感は高まっている。イオンではプライベートブランド（以下「PB」という）「トップバリュ」としてフィレを販売しているほか、くら寿司では「活〆パンガシウス」の名称で、寿司ネタとして販売している。近年は、味付け商品や衣付き商品を展開し、付加価値の向上や他商品との差別化を図る企業もみられる。淡白な味わいで加工がしやすいことから、フライやムニエルなど惣菜用途での利用拡大も見込まれる。

第1図　世界の漁獲漁業と養殖業の生産量推移



資料　FAO「FishStatJ」
（注）　藻類養殖は除く

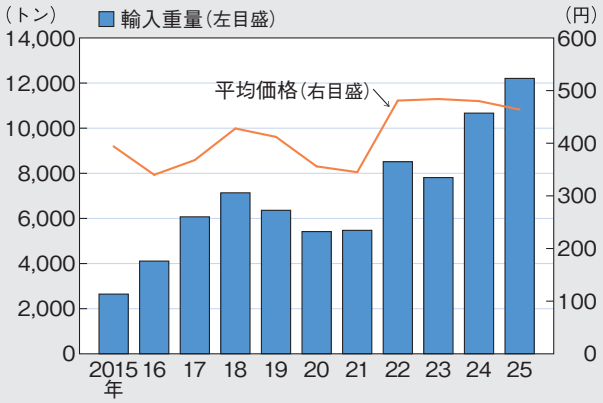
第2図　世界の主要魚種価格指数の変化



資料　FAO「Fish Price Index」
（注）　各月の数値は12か月後方移動平均値を使用

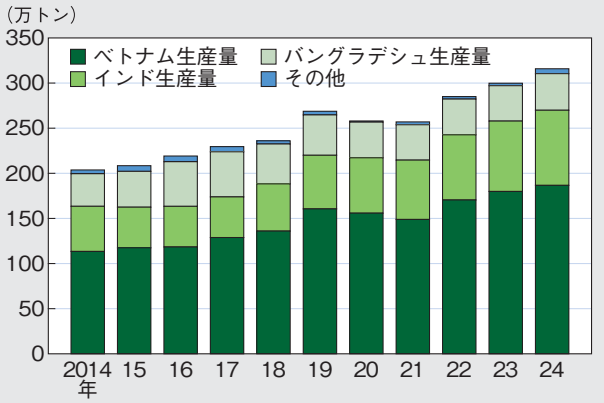
農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

第3図　日本におけるベトナム産パンガシウスの輸入量と価格の推移



資料　財務省「貿易統計」
（注）　関税分類番号（HSコード）0304.62-000：「なまずフィレ」を本稿では便宜上パンガシウスとしている

第4図　世界におけるパンガシウス生産量の推移



資料　第1図に同じ

2　世界の生産・輸出構造と日本への影響見通し

FAOによると、世界全体のパンガシウス（Striped catfish）の生産量は14年から24年までの10年で100万トン以上増加しており、24年には300万トンを超えている（第４図）。その内訳をみると、ベトナムが187万トンと最も多く、インドが83万トン、バングラデシュが40万トンと続く。インドネシアや中国などの分類不明種を含めると生産量はさらに多い。

ベトナムでは輸出向けの生産が大部分を占める。25年は輸出数量の27％を中国、12％を米国が占め、両国で約４割に達する。近年は、中国と米国以外への輸出も増加し、輸出先の多様化が進んでいる（FAO[2026b]）。一方で、養殖、輸送コストが上昇しており、今後は生産量の拡大だけでなく、高付加価値製品への転換が課題になるとの指摘もある（VASEP[2026]）。こうした動きは、将来的に価格の上昇要因となる可能性がある。

インドとバングラデシュでは、パンガシウスの輸出は限定的であり、国内向けの供給が中心である。しかしながら、世界的な白身養殖魚の需要拡大を受けて輸出体制を整備する可能性がある。Alam et al.(2024)は、輸出体制の整備に向けた課題として、身色などの品質改善、養殖管理体制と加工・流通インフラの整備、養殖技術の向上、国際認証への対応、輸出関連政策の充実を挙げている。

現在、輸出市場ではベトナムが圧倒的な地位を占めているが、今後その他の国で品質改善や輸出体制の整備が進めば、供給国が多様化する可能性がある。また、ベトナム産の高付加価値化に伴って価格が上昇した場合、日本市場でも、価格競争力のあるフィレを確保するため、インド産やバングラデシュ産を含めて調達先を多様化する動きが生じる可能性がある。

＜参考文献＞

・Alam, M. M., Haque, M. M., and Santi, M. (2024) “Barriers to the Export of Farmed Pangasius and Tilapia from Bangladesh to the International Market: Evidence from Primary and Secondary Data”, *Aquaculture Journal*, 4, pp. 293–315.
・FAO (2026a)“The State of World Fisheries and Aquaculture 2026: Blue Transformation Turning Vision into Impact”.
・FAO (2026b) “GLOBEFISH: Quarterly Pangasius Analysis - May 2026”.
・VASEP (2026) “Pangasius shifts from ‘volume’ to ‘value’ in 2026”. https://seafood.vasep.com.vn/key-seafood-sectors/pangasius/news/pangasius-shifts-from-volume-to-value-in-2026-36527.html （2026年10月５日アクセス）

（むらさわ　ひろき）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/